

# 能を切る



「四賢婦人・矢嶋楯子の生涯」

文||福永無想

## 第九回 「ほころび」

冬枯れの木々の枝ぶりがあらわになる。それは、緑が茂る頃には隠れている本性というものを、まざまざと見せつけられているようである。

「ヨシさん。夫婦って何なのでしょかね」

勝子は、白菜の天日干しを手伝うヨシにつぶやいた。

「元々は他人ですけどん、親きようだいのごつはいかんですたい。ぼってん枕ば並べるうちに、なんとこのう、夫婦らしゅうなつていくとじゃなかですかね」

林家に入り10年の月日が流れ、勝子は3人目の達子を出産していた。夫婦の営みは続いていたが、ヨシが言うように、肌を合わせるほどに情が深まるとは、勝子には思えなかった。

それは七郎の酒癖のことだけではなかった。男であれ女であれ、個々の意思をことさらに尊重して育てられた勝子にとって、林家での暮らしは自尊心を傷つけられることも多く、その圧迫感は耐えきれぬところまで

勝子を追い詰めていた。これまで心のほころびを繕いながら、愚直にも相手が変わってくれることを願ってきたが、もはや、二人を隔てた溝は深まるばかりであった。

慶応3(1867)年、徳川慶喜は朝廷に政権を返上。260年も続いた徳川政権が倒れ新時代の幕が上がった。だが世の中は不安定に揺れ、武士の世も陰りが見え隠れした。それは、250石取りの林家も例外ではなかった。

「士族の身分がのうなるなど、そがんこつがあつてたまるかっ」

七郎は怒りと不安をぶちまけた。明治維新は、このように多くの武士らの期待を大きく裏切ることになっていく。

「これからは武士も百姓も、同じ身分になるとです。今後の暮らしの立て方を考えていかんと、時代に取り残されます」

勝子は七郎に、現実を受け取めてほしかつた。だが、こうして妻の理知が勝ち過ぎるところが、夫の威厳を傷つけてしまうのだ。「こんな家が気に入らんなら、出ていけっ!!」聞き慣れた台詞だったが、勝子の中で何がプツンと切れた。

「よう、分かりました」

それを汐に口をつぐむと、乳飲み子の達子を抱き抱え、振り返ることなく林家を飛び出した。荒瀬橋を渡り杉堂の実家へと歩きながら勝子は、両親の墓が見下ろす、こ

の城ヶ峰の山道を何度往復したことだろうと思う。仲むつまじく生きた父と母の姿が、胸に痛く突き刺さる。

「七郎さんと離縁いたしとうございます」

兄の源助は、すでに諦め顔で勝子を迎えた。この時代、女から離縁を突きつけるなど聞いたことがない。ましてや平民出の妾の立場で、士族の夫にあらがえるはずなどなかった。けれども勝子は林家の迎えに、断髪をもって「無言の離縁状」を突きつけたのだ。それは揺るぎない決意の証であり、良妻となり得なかったという自省が含まれたものでもあった。こうして、七郎との10年に及ぶ生活は終わった。

「人の口に戸は立てられん…」

源助に促され、勝子は達子を連れ矢嶋家を出て、姉らの婚家に身を寄せることにした。3女の順子は夫の竹崎律次郎と布田(西原村)を離れ、横島(玉名)の干拓地「九番新地」で20戸ほどの百姓を抱えた豪農として、開拓に汗を流していた。勝子はしばらく竹崎家に身を寄せることにして、昼間は畑仕事を手伝い、夜は百姓の子どもらに読み書きを教える順子を支えた。

益城を離れて1年がたち、正月の松の内が過ぎた頃だった。

「小楠先生が殺された…」

横井小楠の門弟で知らせを受けた義兄の律次郎は、真っ青な顔で震えていた。

※この物語は、矢嶋楯子の資料をもとに描いたフィクションです



### 四賢婦人記念館

益城町杉堂1250 電話/286-4959

開館/9時30分~16時30分 休館/月曜(祝日の場合は翌日)

入館料/一般・高校生200円(160円)、小中学生100円(80円)

※( )は30人以上の団体割引料金

